

15. 妊娠,分娩および産じょく (O321)

文献

辻内敬子、小井土善彦、木津正義、他. 妊婦のマイナートラブルに鍼灸治療が与える影響. *母性衛生* 2017; 58(2): 443-451. 医中誌 Web ID: 2017338275

1. 目的

妊婦のマイナートラブル (MS) に鍼灸治療が与える影響をより詳細に把握するため。

2. 研究デザイン

比較調査

3. セッティング

開業鍼灸院 3 施設・学校臨床施設 1 施設、日本

4. 参加者

研究協力施設に来院した妊娠 28 週以降の骨盤位を主訴とする妊婦と、妊娠 30~35 週までの MS 質問票の記入依頼に同意した鍼灸治療を行わない骨盤位の妊婦。

5. 介入

Arm 1: 介入群 (三陰交と至陰を主に用い、脈診・舌診・触診で治療部位を決定する治療院の方針に従い治療。週に 1~2 回。)

Arm 2: 対照群 (鍼灸治療を行わない)

6. 主な評価項目

既存の質問票や論文等を参考にして作成した質問票 (40 症状)。介入群は①鍼灸治療開始前、②鍼灸治療から 1 週間以内、③鍼灸治療終了 2 週間経過後の 3 回調査。対照群は平均妊娠週数が①30.8 週、②32.2 週、③34.9 週の 3 回調査。

7. 主な結果

介入群 36 例 (有効回答率 65.5%、平均 33.7 歳±4.0、初産婦 18・経産婦 18)、対照群 9 例 (有効回答率 100%、平均 29.6 歳±3.1、初産婦 9・経産婦 0)。介入群の平均発症数 (±SD) は、①22.3±7.2→②19.4±8.0→③17.3±8.3 で、①と②、②と③には有意差なしだが、①と③で有意差あり。対照群では、①24.4±4.8→②23.8±6.6→③23.4±6.7 で、いずれも有意差なし。群間では①で有意差がなかったが、②および③で有意差あり。介入群の 70%以上にみられた症状は 13 症状だったが③で 3 症状に減少、対照群の 70%以上にみられた症状は 15 症状だったが③で 13 症状であった。

8. 結論・意義

介入群に発症数と発症率の減少がみられた。鍼灸は、妊婦の QOL の向上の一つの手段となり得る可能性が示唆された。

9. 鍼灸医学的言及

便秘や疲労、腹部張り感、泌尿器系症状などの不調を訴えた場合でも腹部への刺鍼を避け、手三里、湧泉、太溪など、数穴を用いて治療を行う方法を採用した。

10. 論文中の安全性評価

あきらかな有害事象はみられなかった。

11. Abstractor のコメント

本研究の限界と今後の課題については著者らが丁寧に考察しているので、ここであえて詳細を指摘しないが、比較した 2 つの集団が同じ条件で集められていないこと、両群がまったく同じタイミングで質問票に記入したわけではないことには注意が必要である。今回の対象者は骨盤位の妊婦であり、骨盤位でない妊婦の場合はどれくらい群間差が生じるのか興味がある。ただ、それらの疑問を差し引いても、介入群と対照群の症状減少の差は大きく、ひとつひとつの症状に丁寧に対処する鍼灸だからこその成果ではないかと思わされるところがある。将来、より条件を均等にした群での比較が行われ、より鍼灸の可能性が確信できるデータが提示されることを期待している。

12. Abstractor and date

山下 仁 2022.3.12